

## 『ドイツ語』

## 第1 高等学校教科担当教員の意見・評価

## 1 前文

今年度の共通テスト『ドイツ語』の受験者は104名であった。昨年度の出題形式の変更を受けて、受験者数の増減があるかと予想したが、ここ数年と変わらなかった。ただ、昨年度の出題と傾向が変わっていないので、平均点も同じように変化が無いかと思っていたが、10年間で一番低い点数となった。

実施年度	H29	H30	H31	R2	R3	R4	R5	R6	R7	R8
受験者数 (人)	116	109	118	116	109	108	84	101	96	104
平均点	128.66	136.83	152.21	147.9	119.25	124.26	121.67	130.95	127.24	109.87

英語以外の外国語は、学習指導要領に「英語に準ずる」と記載されているが、大抵、学校で実施されている授業時間は英語よりもかなり少なく、加えて、ドイツ語を学習している生徒は英語を受験科目として学ぶ生徒と同じく英語も学んでいる。また、ドイツ語には検定教科書は存在せず、教科書も様々でありCEFRに準拠したもの、従来からある文法を中心としたものなどから授業担当者が教材を選択する。受験者は限られた時間のなかで、その教材でドイツ語の学習を進めることになる。ドイツ語学習をめぐる状況は学校によって異なり、平均的なドイツ語学習者を想定しづらくはあるが、ドイツ語を「高校で3年程度継続して学んできた」受験者と仮定し、評価を行っていきたい。

なお、評価に当たっては、15ページに記載の8項目の観点により、総合的に検討を行った。

## 2 内容・範囲

昨年度、大幅に出題傾向が変更になったことと比較すると、出題形式に特に驚きはなかった。以前あった発音・アクセントに関する知識を問う出題は継続して出題されていない。また、昨年度この場で述べた表記等については改善されている。昨年度同様に、特定の場面や状況に応じた会話や長文など、受験者には今まで以上に幅広く学び正確な知識が求められる出題である。

第1問 各設問箇所にどの品詞や語尾が入るのか見極め、それに応じた適切な選択肢を選ぶ。ある街の紹介文を読みながら総合的な文法問題に取り組む。昨年度の問題に目を通しているのであれば、取り組みにくさはそこまでないが、本文の文脈が解答に与える影響は少ない。

問1 昨年度この場で「与えられた選択肢には2つ使わないものがあるが、重複して解答してよいのか設問に第2問のように指示がない。」と指摘をしたが、今年度は、選択肢の使用回数に対する言及がなされた。各解答は、**1**再帰代名詞4格 sich, **2**本動詞 haben の人称変化で人口を表す, **3**früher を手掛かりに動詞 sein の過去形, **4**sein+zu 不定詞の sein の人称変化, **5**男性1格の定冠詞とともに用いる形容詞の語尾, **6**男性1格の定冠詞とともに用いる形容詞(最上級)の語尾, **7**頻繁に教える再帰動詞 an+sich+erinnern ではなく、他動詞 erinnern と一緒に用いる前置詞が問われている。特に**1**, **4**, **7**の表現を知らない場合、正答するのは難しいか。**4**, **7**は授業ではあまり扱わない。**2**,

3 以外は文脈で判断するよりは設問の部分に着目すれば解答可能である。昨年度のような分離動詞の前つづりを問うような出題はなかった。

問2 正答するには文脈とは関わりなく、(ア) 否定冠詞の1格、名詞 Stadt の性、(イ) 前置詞 für の格支配、Fest の名詞の性、(ウ) bieten+3格+4格のうちの3格、所有冠詞の3格、(エ) 前置詞 an の格支配、関係代名詞3格、名詞 Ort の性の知識についてそれぞれ問われている。(ウ) の Besucher が複数形であることがわかるか。(エ) は難。先行詞と関係代名詞の間に zu 不定詞があり、関係文の主部も sowohl～ als auch...の構文の中にあり、かなり複雑である。昨年度も述べたが、設問文に「適切なもの」とあるがここまで文法用語を避ける必要があるのか。せめて教科書で用いられている「適切な変化」や「適切な語尾」と問うことはできないのだろうか。

第2問 以前からある出題形式で、昨年度と同様に出題は3つ。与えられた語を空所に当てはめ、文を完成させる出題。不要な選択肢が1つあり、文法の知識を問う出題となっている。

問1 知覚動詞と助動詞が同時に用いられた文からの出題。12には主語が、13には知覚動詞とともに用いられる不定詞が入る。知覚動詞や知覚動詞と同時に助動詞が用いられる用法は教科書にはあまり取り上げられていないが、共通テストではよく目にする出題。

問2 間接疑問文内の wie lange の位置と、「,」以下の従属接続詞 bis に導かれる副文の語順が問われている。wie lange と wie viel の区別は知っていただきたい。

問3 従属接続詞 da に導かれる副文の中で、16には再帰動詞 sich+merken ではなく、3格+4格+merken の再帰代名詞3格を選択する。そして、17には前置詞 von の格支配と Leute が複数であることを理解している必要がある。主文にも in 3格+sich<sup>4</sup>+irren と再帰動詞が用いられており、判断に迷うかもしれない。

第3問 一連の比較的長い会話等を読み、設問に答える。設問文後の登場人物と状況の説明が日本語であり、日本での旅行がテーマとなっているので、場面の想像はしやすい。場面の説明文がドイツ語で書かれているが、会話の間に個人のブログや旅程に示されたドイツ語で書かれた情報が挟まれており、昨年度よりも状況や絵に配慮が感じられ、使用語彙もそこまで難しくはなはない。しかし、使用語数が全設問の中で最も多く、設問に答えるためにページを何度も行き来する必要があり、解くのに非常に時間を要する。

問1 18の前後の対話から「一緒に行く気がある」正答④を選ぶのは難しくはないはずだが、決定疑問文に対する答えには、Ja/Nein が必ず必要だと教わった受験者の中には①や②の可能性を消去できない者もいたかもしれない。

問2 下線部⑱「Unsinn」の言い換えを選ぶ。他の選択肢と比べると正答は①ではあるが、問1で取り違えたままだと正当を選ぶのに迷うかもしれない。Unsinn がわからないと、③を当てはめて、彼と一緒に過ごしたいという気持ちに賛同する発言を選ぶ可能性はある。問1とは違い、下線部⑱以降に aber のような内容を否定する表現はないことに気づかなければならない。

問3 他の選択肢には本文や絵と明らかに違う部分があり、Tobi が何を体験しているかわかれば正当①を選べる。ただ、Reh が freundlich かどうかは判断が別れるだろう。また選択肢②には、「Sommerfest」という語が使われているので、第1問問2(イ)の名詞の性を理解する一助となる。

問4 「lassen」がどのような意味で使われているかを読み取る難しい出題。「させる、ままする」という助動詞のような用法ではなく、「～を止める」という意味の4格目的語をとる他動詞としての用法を知っている受験者はほばいないのではないかと。また、後ろのセリフで熊

を見に行かないことを明言はしておらず、迷う受験者も多かったと推測する。他動詞としての lassen が扱われる教科書で授業をしたことはない。

問5 予定を変更した理由とその結果の両方を本文中から読み取る出題。正答④の使用単語はそこまで難しくはないが、②verzichten auf 4格や③sowohl ~ als auch...などを知らないと思ってしまうかもしれない。

問6 12ページ以降の対話から旅行プランの変更点を読み取る。設問内にも行程表を載せているので取り組みやすいが、本来の宿泊地の起点が名古屋だということを確認するには11ページの行程表を改めて読んだ方がよい。12ページの下にLinaとTobiのやり取りで宿泊地についてまとめられている。設問を解く上で12ページの下が鍵となることを理解するためには、12ページを読みなおす必要がある。良問ではあるが、この1問を解くのに時間を要する。

問7 ドイツ語の設問であるが、ドイツ語の表現に配慮がなされている。正答③⑤を選ぶのは、ここまでの内容が理解できていればそこまで難しくはないが、登場人物の誰がどう思っているのか、何を・したのか再度注意深く読む必要がある。

第4問 昨年度に続き、インタビューを読み、内容をメモに置き換えたり、スライドにまとめたりする出題。今回のテーマは「金継ぎ」であることが、導入部の日本語に明記されている。金継ぎについて知識があれば自分の知識との答え合わせをしながら読み進められるが、全く知らない場合には読みながら知識を得ることになり、事前の知識の差が理解度の差につながる可能性があるテーマである。第3問とは違い siezen で対話が進められている。

問1 メモを読み穴埋めをする。本文中の「sichtbar」と設問の(ア)erkennbar、「entfernen」と(イ)verstecken、「sehr kostbar」と(ウ)wertvollの言い換えがわかるか。特にメモにある「Schäden」と「entfernen」はやや難の語であることを踏まえると、すべての語がわかって正答にたどりついた受験者は少ないのではないか。

問2 本文中の「Chance」の言い換え Möglichkeit を選ぶ。この語彙は対として扱うことが多いので、正答率があまり伸びていないことに少し驚いている。GelegenheitのみをChanceの同義語だと覚えていると難しいかもしれない。

問3 プレゼンテーション用スライドを選ぶ出題。最近ではプレゼンテーションが高校生にとって身近なものになってきているので、導入・展開・まとめのような語彙を学んでいる可能性は高い。特に29に入る④は金継ぎを知っている者には選ぶことは難しくはないが、金継ぎを知らない受験者は、Rissやauffallenなどのスライドにあるドイツ語を事前の知識なしに読み取らねばならない。また、最後の30に入る⑤を選ぶのに、スライド中のSchönheit muss nicht perfekt seinを理解すること自体は難しくはないが、本文中からそのようにまとめる明確な根拠を見つけられず迷った受験者もいたのではなか。

問4 本文内容の理解が問われ、正答を2つ選ぶ出題。ドイツ語が比較的平易にまとめられ、本文の記載と違う部分のはっきりしているため、④⑤を選ぶのは難しくはない。

問5 金継ぎの理解を図る出題。問5より語彙がやや難しい。設問に含まれる unsichtbar の一部である「sichtbar」は、問1に続きここでも出題にかかわっている。erneuen はやや難の語であり、読み違える可能性がある。

第5問 比較的長い文を読み、図の情報を統合して問に答える。本文は、「余暇の過ごし方」という身近なテーマであるが、前年度と違い資料を読む補助にはなっておらず、設問に答えるために資料を独自に細かく分析しなければならず、取り組みにくい。表にデータの出典が示された。

問1 タイトルの一部として正答③を選ぶのはそこまで難しくはないと感じたが、②の weiterhin の意味を読み取れなかった場合、②を選んでしまう可能性もある。

問2 資料1の人数を分数に置き換えて、比較級の用法 weniger/mehr als ...が分かれば2つの正答②③を選ぶことはそこまで難しくはない。

問3 問3の設問文を読んで初めて資料1と2の凡例が Freizeitaktivitäten の特徴を表していることをわかった上で、37に当てはまるものを1つ選ぶ。4つの分類のうち3つは単語が提示されているが、意図する概念についての説明がなく、受験者は意図や具体的行為について判断しなければならない。資料が2ページにわたっていること、休暇中の行動が特徴ごとに分かれていないこともあり迷う要素が多い。etwas mit Freunden machenに含まれる行為が多岐にわたるため、②kostenlos を排除しきれない。受験者の年齢層を考えると、友人と何かをすることに改めてお金をかけていない可能性もある。ausschlafen は健康的であるのか。

問4 2019年の情報を本文から、2024年の情報を資料1から読み取り、両方を照らし合わせて適切なものを選ぶ。本文「Telefonieren」と資料1 telefonieren の部分が読み取れば選ぶのは難しくはない。

問5 下線部⑨と同じ表現を日本語の選択肢から選ぶ。問2としても出題されてもいいのではないかと感じた。一般常識と照らし合わせても解答できるかもしれない。

問6 まず、設問文の「両方の傾向を示すもの」という表現は何をしなければいけないのか戸惑った。選択肢を読んでいくと、資料1と2の両方のグラフにある項目について述べている人物を選ぶことがわかってくる。正当は①ではあるが、④の人物の mit meinen Freuden in der Stadt telefonieren と資料2にある etwas mit Freunden machen の「etwas」に telefonieren を含まれるのであれば④も正答の可能性がでてくるのではないか。資料1では machen で現在を表し、資料2では möchte tun で未来の希望・願望を表していると考えられるが、möchte も「今現在」したいことと捉えている受験者もいるかもしれない。この設問を解くのに、資料1と2を読み返し、4人の人物の発言内容と一致させなければならないので、問5を解く時間と比べると同じ配点ながら時間がかかる。なお、第5問の本文の長さと問6のドイツ語の分量に大きな差がない。

第6問 心理カウンセラーの立場から書かれた比較的長い文章からの出題。抽象的な概念・内容について説明をしているので使用語彙や言い回しが難しいと感じた。テーマは1つであり、カウンセラーの立場からの文ではあるが、Clara という人物の具体的な話から、人間関係の対立に関する抽象的な話に発展し、再びClara の事例に戻ることで、展開をしっかりと理解する必要がある。全体の時間配分を間違えると、第6問に対し十分思考する時間がなかったかもしれない。

問1 41に入れる名詞を1つ選ぶ。正答 Einigkeit 自体もやや難しい語である。① Gemütlichkeit は雰囲気に対して使い、本来人間関係に対しては使用することができないのだが、現代の人付き合いにおいて、よい友だち付き合いを「争いごともなく居心地がよいこと」と捉え①を選択した受験者もいたのではないか。

問2 下線部⑫についてClara の行動を2つ選ぶ。選択肢が日本語であり、下線部の前の文が理解できていれば2つ選ぶことはそこまで難しくはない。

問3 ドイツ語の選択肢から1つ選ぶ。正答④の Sieg, Niederlage という語が本文中の「Gewinner」「Verlierer」の言い換えであることがわかるか。特に選択肢の Sieg, Niederlage は受験者にはあまり馴染みがないかもしれない。

問4 下線部⑬について述べていることを日本語で書かれた選択肢から選ぶ。下線部⑬からの段落を読むことで、①～③の選択肢には明らかに本文内容と違う部分があるので④を選ぶ。問4の出題文にある「筆者が相談者と目指していること」は、選択肢を読むことで初めてわか

る。正答が理解できると、④の内容は30ページの4段落目の中で一般的なこととして書かれ、その行動の具体例が31ページ2段落目に書かれていることが見えてくる。

問5 本文全体を読み、言い換えられている選択肢の表現が本文中の表現と同じであることを確かめる。正答以外の選択肢に明らかに違う表現があり、ドイツ語ではあるが正答を2つ選ぶのはそこまで難しくはないかもしれない。本文「richtigzustellen」と選択肢③sich äußernが言い換えであることがわかるか。

問6 本文の大まかなテーマが読み取れていれば正答②を選ぶのは難しくはない。

### 3 分量・程度

使用語彙の難度は適切であったが、昨年度の共通テストと比較すると使用語数は大幅に増え、1つの設問を解くのに複数ページを複数回参照しなければならず、取り組みにくさがかなり増した。特に第3問以降は何度もページを読み返して設問に答えることが多く、実際の語数よりも分量が多いように感じた。共通テスト「英語」での問題設定レベルおよび使用語彙はCEFR A1～B1の範囲とされている。ドイツ語も英語に準拠するのが原則ではあるが、到達すべきレベルをB1と設定することにはまだ議論の余地があるのではないか。

### 4 表現・形式

内容・範囲でも述べたが、共通テスト『ドイツ語』にはリスニングの設定がなく、受験者にアクセントや母音の長短を身に着ける意識を持たせるためにも発音に関する出題があってもいいと思う。試験の出題にあるだけで、発音を重点的に教えることができる。ドイツ滞在歴の有無によって理解に差がでないようにする配慮を感じたが、第4問では日本に重きを置きすぎたからか、事前の知識の有無によって理解度に差が生じる印象を受けた。また、第1問は文脈を把握し理解度を測るような設問に見えたが、実際には、今回もかなり細かな文法と語彙の知識が求められていた。

### 5 まとめ（総括的な評価）

CEFRという言葉で以前より目にするが増えたが、本来CEFRは、多文化・多言語な環境であるヨーロッパで、共生のために複言語能力を4技能において育成することを1つの目的として作られている。しかし、日本ではとりわけ大学入試につながるようなさまざまな検定試験のレベルを比較するためのスケールとして扱われることが多い。共通テストにおける外国語試験では、必ずしも4技能の能力を測ることはできず、殊に共通テスト『ドイツ語』では、英語と異なりリスニング試験がないなかで、ここ2年間の試験において発音に関する問題も出題されていない。

次年度も共通テスト『ドイツ語』は実施される。少子化や学習者数の減少を鑑みると継続的な実施については議論の対象となるかもしれない。前文で述べたように英語を学んだ上で、第2外国語も学ぶ生徒が尊重され、大学入試や大学での更なる学びへとつながられるような仕組みが望まれる。複言語学習を通じて得られる、思考力・判断力・表現力・価値観は、多様な人々と共生していくためには必要不可欠であろう。そのように常に学び続けられる人でいられることは、学習指導要領の目標「学びに向かう人間性」とCEFRの理念にも合致する。

細かい点を色々述べさせていただいたが、共通テスト『ドイツ語』の問題作成に対し、多くの時間と手間をかけてくださっている問題作成委員、大学入試センターの方々には毎回のことながら感謝申し上げます。